

タイトル：平成 30（2018）年度 教育セミナー（第 14 回）

日時：2018 年 9 月 13 日（木）～16 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

「西アフリカにおけるムスリムと非ムスリムの境界」

荻谷 康太（AA 研）

本セミナーでは、19 世紀初頭の西アフリカ東部（スーダーン中部）に成立したソコト・カリフ国の支配層が、軍事ジハードを遂行する中でムスリムと非ムスリム（不信仰者）を如何に定義したのかを検討した。

フルベのイスラーム知識人であるウスマーン・ブン・フーディー（‘Uthmān bn Fūdī, 1817 年歿。ウスマン・ダン・フォディオ）は、1804 年、宗教・社会改革運動の一環として、ハウサランド（現在のナイジェリア北部及びニジェール南部に相当する地域）の既存のハウサ人諸国家に対して軍事ジハードを開始した。このジハードは瞬く間にハウサランドの広域とその周辺地域に拡大し、1812 年頃までにイスラーム法を統治の基盤とする強大な国家、ソコト・カリフ国の基礎を築いた。

イスラーム法においてジハードの正当な攻撃対象として認められるのは、原則的に不信仰者のみである。このため、「正しい」イスラームの拡大とイスラーム法を統治の基盤とする政体の確立を目指したウスマーンら初期ソコト・カリフ国の支配層は、『クルアーン』やハディース、権威ある先達の見解に依拠しながら、敵対勢力が不信仰者であることを証明し、ジハードがイスラーム法に則していることを明らかにする必要性に迫られた。

こうした状況にあって、ウスマーンらは、その著作の中で、まず 1804 年以降のジハードにおいて主要な敵対勢力となったハウサ諸国の支配層の不信仰性を論じた。ウスマーンらが着目したのは、ムスリムを自称するハウサの支配層がイスラームの宗教的行為のみならず、非イスラームの宗教的行為も同時に行っていた点であった。ウスマーンらは、北アフリカのムハンマド・アル=マギーリー（Muḥammad al-Maghīlī, 1505 年頃歿）というイスラーム知識人の著作などを参照しつつ、ハウサの支配層を「混淆者」（mukhalliṭ, イスラームの諸行と非イスラームの諸行を混淆する者）と定義し、この混淆者が不信仰者の一類型であると論じた。これによって、ソコト・カリフ国が既存のハウサ諸国を打倒し、権力を奪取することを正当化しようとしたのである。

ところが、1808 年頃からハウサランドに隣接するボルヌと本格的に対立するようになると、ウスマーンらは、ボルヌの支配層に対するジハードを正当化する新たな論理の構築に迫られた。何故なら、ボルヌは西アフリカにおいて古くからイスラームの根づいた土地と認識され、そこに住む人々はムスリムと考えられていたためである。そこで初期ソコト・カリフ国の支配層は、ボルヌの支配層が不信仰者（混淆者）であるハウサ諸国の支配層に対して軍事的な支援を行った事実に着目すると同時に、それまで自らの著作の中で詳細に論じてこなかった「背教」（irtidād）の概念を持ち出し、仮にかつて「正しい」ムスリムであったとしても、不信仰者と友好関係を築き、ムスリムであるソコト・カリフ国の支配層に敵対した者は不信仰者の一類型である「背教者」（murtadd）に認定されるとの論理を提示したのである。